

# 「日本写真保存センター」調査活動報告 (9)

写真原板の収蔵施設決まる。  
相模原市の東京国立近代美術館フィルムセンター

松本 徳彦  
(専務理事、日本写真保存センター設立推進連盟事務局長)

平成19年度から始まった「我が国の写真フィルムの保存・活用に関する調査研究」は、物故された写真家の遺族の元を訪ね、写真原板(フィルム等)の保存状況の現地調査を行い4年間で、74人の写真家の約118万本(35mm、6×6、4×5フィルム等)の保存状況を調査した。さらに遺族からフィルムの寄贈を受けたもの、調査のために借り受けたものなど約4万8千本をJCIIビル3階の調査作業室で、大学院や美術館等でデータ処理などを経験したアルバイト延べ9人によって整理を行い、収集したフィルムの画像情報をデータベース化した。

## フィルムの劣化「ピネガーシンドローム」

この調査活動で最も関心を呼んだものにフィルムの加水分解による劣化、ピネガーシンドロームの実態をあからさまにしたことであった。この現象はこれまで図書館のマイクロフィルムや戦前の映画フィルムなどで起こっていることは知られていたが、戦後の写真フィルムで大量に発生していることはあまり知られていなかった。今回の調査で想像以上に多くの劣化したフィルムの実態を発見し、新聞、テレビ等で公表してきた。その実例を公開したのが平成22年3月、「ときを刻んだ写真-保存が望まれるフィルム」と題する写真展とシンポジウム「なぜフィルムの保存が必要か」(JCIIフォトサロン)での講演であった。NHKテレビをはじめ新聞等の報道もあって、マスメディア関係者、プロ、アマチュア写真家、企業関係者、博物館などの研究者が多数訪れ、劣化したフィルムの実物を見て驚き、一様にフィルムの長期保存についての研究と延命方法が語られていた。

## フィルム収蔵庫の室温10°C、相対湿度40%

一方、写真原板を長期に保存する収蔵施設については、文化庁が相模原にある東京国立近代美術館のフィルムセンターの収蔵庫の一部を、平成23年度に増築された収蔵庫の乾燥を待って、平成24年度から借り受けることになっている。借用が決まった場所は旧館の地下1階の収蔵庫4室約500㎡。室温10°C、相対湿度40%という、フィルム保存には最適の環境が整った収蔵庫が用意された。この施設を昨年暮れの12月22日、田沼会長と写真保存センターの諮問委員、保存科学の専門家など7名が文化庁とフィルムセンターの係官の案内で収蔵庫を見学した。



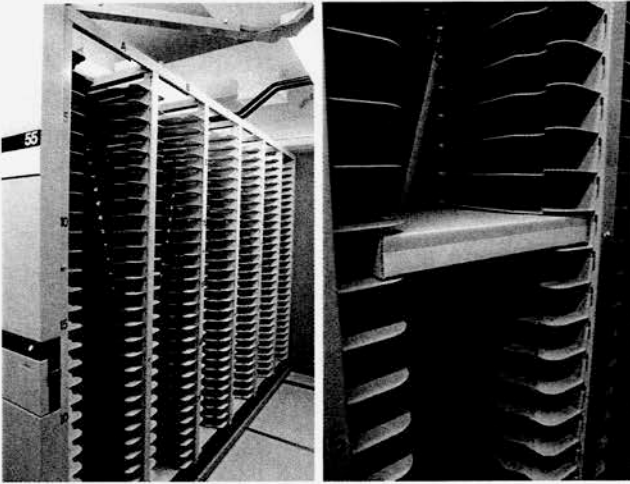
東京国立近代美術館フィルムセンターの全景

## 収蔵庫4室、約500㎡

本館の西寄りピロティで下足をスリッパに履き替え階段で地下に降りる(エレベータは点検中)。冬場でも地下に降りるに従って気温が下がってくるのが感じられる。踊り場から予備室前を通ってずらっと並ぶ収蔵庫の扉、1から4までの数字が並ぶ。この日は3(103)号室を見学する。収蔵庫内は通路を挟んで両側に電動で可動するスチール製の収蔵ラックが片側に34台ずつ並んで合計68台ある。1台のラックに収納できる棚が上下30段、左右6列、計180段あるので、1室で12,240段分の収蔵が可能である。本来この棚は映画用の2,000ft缶が入る高さ58mm、幅395mm、奥行38mmの構造であるものを借りるもので、現在、写真保存センターで使用している中性紙のストレージボックス(35mmフィルムホルダー約80本分収納)が、左右に50mmほどの余裕をもってそのまま入れることができる。また、棚の高さを変えられるように棚板が取り外せる構造になっているので、高さの異なる4×5インチフィルムのボックスも収納することができる。しかしこの場所はフィルムの収蔵庫であるため、フィルムのクリーニングや画像情報の収集を行う作業室としては使うことができず、作業室は別に設ける必要がある。そのために昨年10月からJCIIビルの4階の1室を借りて作業拠点とすることにした。

## 文化関係資料のアーカイブ

平成23年度からは「文化関係資料(テレビや放送の脚本、台本と音楽関係の楽譜など)のアーカイブ構築に関する調査研究」へと歩みを進めることになり、フィルムの保存と利活用に向けてのデータベース化、それを運営するアーカイブの構



収蔵庫内部の可動式収蔵ラックと棚

築に関する調査を行うことになった。画像情報のデータベース化については、凸版印刷の協力を得て博物館等で利用されている簡易データベースソフトのMuseScopeを使って、現在収集しているフィルムの写真画像情報をデータベース化し、インターネットを介して画像情報が、どの程度検索でき、活用できるかの実証実験を、昨年10月からマスコミ、美術館、大学などの研究者、専門家129人に依頼して検証している。今年1月末には実証結果が集約され、検討をした上で文化庁に報告することになっている。

### データベースの実証実験

写真保存センターのデータベース(DB)構築にあたっては、諮問委員、調査委員9人によるDB分科会を設けて、写真原板の受け入れ時に登録した基本台帳から、次の必須記入項目を設定した。撮影者名(ローマ字、生没年月日、著作権継承者名、連絡先)、撮影年月日、撮影場所、撮影内容(タイトル、テーマ名、被写体に関する情報)、原板の種別(サイズ、モノクロ、カラー)、画像分類(被写体キーワード)、掲載情報(初出年、媒体名、形式)、登録番号、収蔵場所(棚位置番号)、権利処理(公開、利用条件)、複製(スキャニング、プリント)、原板の状態(劣化の有無)などを入力し、一般公開するDBについては、必須5項目、研究者用にはセンター内で検索できる項目と二種類に分けて利用する。

今回の実証実験では利用が多いと判断されるマスコミ、美術館、大学などの専門家にDBの検索機能の利便性について調査を依頼した。

### 年次報告書の閲覧

文化庁に提出した写真保存センターの調査研究報告書(PDF)は、文化庁の許可を得てJPSのホームページ(<http://www.jps.gr.jp/>)で公開しているので閲覧してみてください。各年度の主な調査内容を記す。

- ・平成19年度、本調査の概要、フィルムの保存・活用に関する基本的な考え、調査概要、国内調査(国立民族学博物館)、海外調査(フランス、アメリカ)、処理済みフィルムの保存に関して(ビネガーシンドローム)、今後の課題(写真保存センターの必要性)。
- ・平成20年度、上記のほか、国内調査(写真原板とは、なぜ保存するのか)、海外調査(イギリス、オランダ、アメリカ、カナダ)、利活用に関する基本的な考え(活用することの意味、利活用の仕組み)。
- ・平成21年度、概要のほか、調査研究の実施概要、保存・活用事業に関する基本的な考え、調査概要、調査作業(写真原板とフィルムホルダーの保存、スキャニングによるデータ作成、劣化したフィルムの扱い方)、利活用に関する考え(著作権に関する権利処理)、今後の課題。
- ・平成22年度、概要、実施計画のほか、保存・活用に関する基本的な考え方(写真家の選定基準、写真フィルムの位置付け、アーカイブとしてのデータベース、画像のクオリティー、台帳項目の統一など)、調査作業の流れ、利活用に関する規約、広報活動(「ときを刻んだ写真-保存が望まれるフィルム」展とシンポジウム「なぜフィルムの保存が必要か」)。

### 設立運動の歩み

- ・2001(平成13)年5月24日、日本写真家協会会長田沼武能が社団法人設立祝賀会で「写真原板の保存の必要性」を提唱する。協会内に設立基金を設ける。
- ・2006(平成18)年3月14日、「日本写真保存センター」の設立発起人会を開き、「日本写真保存センター設立推進連盟」を設立。代表に森山真弓、副代表に田沼武能を選ぶ。
- ・2006(平成18)年5月25日、文化庁に「日本写真保存センター」の設立要望書を提出する。
- ・2006(平成18)年7月19日、「日本写真保存センター」の設立について記者発表する。
- ・2006(平成18)年12月20日、文化庁は平成19年度委嘱事業として「我が国の写真フィルムの保存・活用に関する調査研究」の予算、諮問・調査委員を決める。
- ・2007(平成19)年4月より、調査研究を始める。以後、平成20、21、22年度と継続して調査活動を行う。
- ・2010(平成22)年5月18日、文化庁は相模原に増築中のフィルムセンター内の収蔵庫の一部(500㎡)を「日本写真保存センター」(日本写真家協会)に貸し出す案を提示。文化庁、東京国立近代美術館と協議を始める。
- ・2011(平成23)年1月、文化庁は平成23年度委嘱事業を「文化関係資料のアーカイブの構築に関する調査研究」とし、調査研究費に収蔵庫経費の増額が認められる。
- ・2011(平成23)年3月1日から27日、JCIフォトサロンで「ときを刻んだ写真-保存が望まれるフィルム」展と、3月5日「なぜフィルムの保存が必要か」シンポジウム(金子隆一、高橋英則、松本徳彦)を開催。マスコミでフィルムの劣化(ビネガーシンドローム問題)が大きく取り上げられる。
- ・2011(平成23)年7月21日、相模原のフィルムセンター収蔵庫(約500㎡)を文化庁から借りることの打ち合わせを行う。
- ・2011(平成23)年10月、保存センターの作業室をJCIビル4階に拡充移設する。
- ・2011(平成23)年10月、日本写真家協会のホームページを使って、画像検索システムの実証実験を始める。
- ・2011(平成23)年12月22日、相模原のフィルムセンター収蔵庫の実地見学を行う。

## 調査活動報告

平成23年度の物故作家の写真原板調査は、松島 進、藤井秀樹、新山 清、神山洋一、川村光章、迫 幸一、西澤豊、佐々木雄一郎、佐藤明諸氏と次の3名を加えた13名であった。

### 典型としての山村を撮った 朝倉 隆

岩波写真文庫『村と森林』で山村の写真記録を残した朝倉隆氏(会員)は世田谷区代田において2007年まで活動。83歳で逝去、信子夫人は1年後、狛江市に転居とのこと。

『村と森林』は山梨県三富村広瀬を、日本における山村の典型として選び紹介したものが大沢道生、川島浩氏らとともに朝倉氏は優れたドキュメントを残した。

『日本の子ども60年』に収録されている妹を背負い子守りしながら立ったまま授業をうける作品は当時の山村記録として貴重なものだ。転居の際、一部のネガは破棄したとのことであったが山村関係の35ミリネガは無事。木造建物の1階、夫人の居室で収納棚の段ボール箱6個、山村関係以外のフィルムとともに保存されていた。グラシン紙製ネガケースは朝倉氏の指示により夫人が黄色紙テープで束ねてあるが分類は不明とのこと。段ボール箱も朝倉氏の指示により撮影内容が表記されていた。1950年代撮影のモノクロネガはかすかに酢酸臭を感じたが全体として良好。多少の汚れ・銀鏡はあるもののカビの発生、折れなどの破損はほとんどなかった。1枚のメモ書き以外にわずかの密着、ネガ管理のための台帳などは作られていなかった。



「土門拳の日本」を特集した平凡社刊雑誌『太陽』395号の表紙は鳥取砂丘で撮影する土門氏へ日除けコウモリをさす朝倉氏を植田正治氏が撮影したもの。この『太陽』を大事に保存している信子夫人は三富村広瀬の撮影当時は生活がたいへんだったとも話された。2007年没。

(小池 汪)

### 人物写真で定評の高い 石松健男

JR日豊線宇佐駅前の大正期からの旅館に生まれ、母屋に隣接してスタジオを兼ねた仕事場がある。数年前、がんを宣告されそれまで撮りためてきた作品やネガフィルムの整理をする。作品集や新聞雑誌などに使用されたフィルムを6コマに切り離し、新しいホルダーに入れ替える。そのため残されたフィルムは少なく、スチールロッカーに綺麗に整理されていた。プリント作品もテーマ毎にまとめら

れ、スタジオ上の納戸に納められていた。

特に新聞で使用した88人の有名人のネガホルダーには、撮影日、場所などと人物名が丁寧に書きこまれ、いつでも注文中に応じられるように整理してあった。預かったフィルムは142本と少ないが、のちに約200本のフィルムが送られてきた。

氏は1936年大分県宇佐市で生まれる。日本大学芸術学部を卒業。フリーの写真家として活動。主な写真集に『花柳幻舟・残情死考』、『本郷新彫刻集』、『オフのゆふいん』、『国東半島の峯入り』などと、1960年代の吉村益信とネオタダの仲間たち、映画スチールで吉田喜重監督の「煉獄エロイカ」、村野鐵太郎の「国東物語」などがある。

近年は大分合同新聞で地元出身の芸術家、経済人、芸能人などを数年にわたって連載する。2001年に催した写真展「在りし日の朝倉文夫」は秀逸と言われる。2008年没。

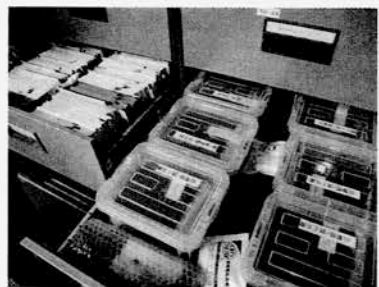
(松本徳彦)



### 生涯を富士山の写真に注いだ 飯島志津夫

氏は初期のモノクロ作品集『富士山その風土と山道』は、富士を取り囲む風景と富士講の人々の登山姿を撮ったものであるが、やがて'70年後半からは、単身で富士の裾野に居を移し、富士山の風景写真一筋に絞り全て大判カラー撮影に移行していった。

保存は、紙製のマウントに1枚1枚納められ、大きく分けて3カ所、別棟の倉庫には1列約500枚ほど入る鉄製の箱が約40箱。自宅の納戸には、倉庫のものと同様大きさのプラスチックボックスが約20個、作業部屋では5~6本のロッカーに納められていた。整然と整理されていて今すぐにも取り出せるような良好な状態であった。



奥さんがおっしゃるのには「残された作品は、4×5判で10万枚か20万枚か判りません。」とのことでした。フィルムはほとんどがカラーということで、現在進行中のモノクロ中心の収集・保存を抜本的に考え直さなければならない調査であった。2007年没。

(高井 潔)